

《研究ノート》

スポーツ文化財としての
オリンピック関連資料の収集について 第二報
— 1920 年第 7 回アントワープオリンピックに関する収集体 —

*Second Report on Olympic memorabilia, constituting sports cultural assets,
relating to the 1920 Antwerp Olympic Games*

藤 瀬 武 彦*

Abstract

The author has presented part of a collection of Olympic memorabilia relating to the 1920 Antwerp Olympic Games. The second report includes a commemoration medal of the Japanese Olympic athletes cheering team in Antwerp Olympic Games; the old photographs of 1917 and 1920 showing Japanese Olympic athlete (Kanekichi Saito and others); The 30th anniversary commemorative book and medal related to the Keio University Tennis Club, which grew up the Olympic silver medalist Ichiya Kumagai; the handwritten autograph of Philip Noel-Baker, who won the silver medal at 1500m Athletics Men. It was very important to identify the names of the Olympic athletes in the old photographs and to determine whether the athletes' autographs were handwritten.

Keywords: Antwerp Olympics, memorabilia, Kanekichi Saito, Ichiya Kumagai, Philip Noel-Baker

1. はじめに

第7回オリンピック競技大会は1920年(大正9年)8月にベルギーのアントワープで開催された。1914年6月にIOC(International Olympic committee:国際オリンピック委員会)はアントワープを第7回大会の開催地に指定していたが、同年6月28日に起きたサラエボ事件(セルビア青年によりオーストリア皇太子夫妻が暗殺された)をきっかけに第一次世界大戦が1914年7月(～1918年11月)に起こり、1916年に予定されていた第6回ベルリン大会が中止となり、また中立国であったベルギーは4年間にわたりドイツの占領や戦争地域となって市街地の破壊や多くの国民が犠牲を強いられてしまった。世界大戦終了後、まだ立ち直っていなかったベルギーであった

* Takehiko Fujise

新潟国際情報大学経営情報学部経営学科
〒950-2292 新潟市西区みずき野 3-1-1

Department of Business Administration, Faculty of Business and Informatics, Niigata University of
International and Information Studies, 3-1-1 Mizukino, Nishi-Ku, Niigata City 950-2292

が、クーベルタンと IOC のメンバーは 1920 年 8 月の第 7 回大会の開催予定を再確認し、ベルギーのオリンピック組織委員のたいへんな努力で立派な競技場や宿舍などが完成して大会を開催することに至った。このとき組織委員会会長として手腕を振るったのが、1903 年に IOC 委員に就任したアンリ・ド・バイエ・ラツール伯爵で、後の第 3 代 IOC 会長(在任期間 1925～1942 年)であった。

この大会では、初めてメインスタジアムにオリンピック旗(五輪旗)が掲揚されたが、このデザインはクーベルタンが古代ギリシャの遺跡に描かれていたものから考案したといわれており、1914 年 6 月の IOC 創立 20 周年記念式典のために作らせたものであった。また、開会式では各国選手団が入場した後に、選手代表の選手宣誓がオリンピック史上初めて行われた。このとき宣誓を行ったのは、1908 年ロンドン大会及び 1912 年ストックホルム大会にベルギーの水球選手として出場し、それぞれ銀と銅を獲得したビクトル・ボアン選手であった。彼はアントワープ大会にはフェンシングの選手として出場し、エペ団体が銀メダルを獲得している。

一方、日本選手団は 2 回目のオリンピック参加となり、嘉納治五郎団長、辰野 保監督、深井健夫役員(会計)、及び選手 15 名(陸上競技 11 名、水上競技 2 名、テニス 2 名:陸上エントリー数は 12 名であるが、斎藤兼吉選手は水上競技(以下水泳)とダブルエントリーしており、陸上には出場していないので 11 名とした)の参加であった。この大会でテニスに出場した熊谷一彌(くまがい いちや)選手はシングルス決勝で南アフリカのレイモンド選手^(註1)に敗れて銀メダルを獲得し、また柏尾誠一郎(かしお せいいちろう)選手と組んだダブルスでも決勝でイギリスのターンバルとウースマン組に敗れて銀メダルを獲得したが、日本人として最初のオリンピックメダリストとなったことは日本のスポーツ史において最も輝かしい功績の一つである。

2. 収集品と解説

1) アントワープ大会の日本選手応援団の記念メダル

写真 1、2、3 に示したメダルはアントワープ大会の日本選手応援団の記念メダルである。2019 年の NHK 大河ドラマ(「いだてん～東京オリムピック噺～」:2019 年 1 月 6 日～12 月 15 日放送)を記念して熊本県玉名市で開館された「日本マラソンの父 金栗四三ミュージアム」(期間:2019 年 1 月 11 日～12 月 23 日)に展示されていたものと同じ記念メダルであるが、そこには専用ケースは展示されていなかった(2019 年 5 月 2 日確認)。その解説としては、題目が「アントワープ大会 応援団の記念メダル」で、説明文が「第 7 回オリンピック・アントワープ大会 白耳義安土府(ベルギー・アントワープ)日本人応援団の記念メダル」であった。現時点においてはそれ以上の情報は見当たらない。

この記念メダルの専用ケースの裏には、写真 4 のようにシールが貼ってあり、そこに「三越」のマークと、「嘉納」とも読める記名がなされており、また「3/9」と記載されていた。「三越」とはおそらく当時の「三越呉服店」(現三越伊勢丹ホールディングス)であり、この会社で製造販売されたものと思われたので、直接会社に問い合わせたがその情報は確認できないとの連絡を受けた(2019 年 12 月 3 日確認)。記名については仮に「嘉納」だとすると、「金栗ミュージアム」に展示されていたメダルが金栗四三選手(マラソン出場)にわたされたものである可能性が高いので、おそらく日本選手団の嘉納治五郎団長にわたされたものか、あるいは応援団の一員として嘉納家にわたされたメダルであったのかもしれない。また「3/9」については、日本選手団はアントワープに向けて 1920 年 5 月 14 日に横浜港を出発しているため、その前にメダルを製造して選手団の役員や選手にもわたされていたとすれば、1920 年の 3 月 9 日を示すものと思われる。



写真1 (左). 1920年アントワープオリンピックの日本選手応援団のメダル (縦65mm × 横51mm).
 写真2 (右). メダルの文字部分の拡大写真 (DE KA 1920 VII E OLYMPIADE EN COMMEMORATION ANVERS-BELGIQUE : 1920年第7回オリンピックアード アントワープ-ベルギー 記念品)

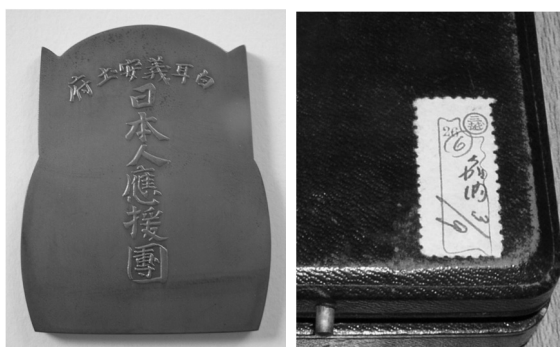


写真3 (左). 日本選手応援団のメダルの裏 (白耳義安土府 日本人応援団).
 写真4 (右). 専用ケース裏側の記名.

2) アントワープ大会に出場した日本人選手の写真

過去にネットオークションで「戦前のオリンピック選手が写っている写真を含む古アルバム」が出品されていたので著者が落札した。元の持ち主は不明であるが、このアルバムには当時の東京高等師範学校 (現筑波大学：以下東京高師と略する) の学生など個人的な写真が多数貼られており、その中の2枚が写真5と写真6に示したアントワープオリンピックに出場した斎藤兼吉選手 (新潟県佐渡出身) が写っているものであった。写真5のキャプションは「大正六年 高師対科レースに優勝」とあり、高等高師の運動会で学科対抗のレースで優勝したときの記念写真であると思われる。その種目は不明だがおそらくボートだと推測される。

斎藤兼吉選手の主な競技歴については、陸上競技の五種競技 (200m、1500m、走り幅跳び、やり投げ、円盤投げ) 及び水泳 (100m と 400m 自由型) にエントリーしていたが、「参加国で二競技以上に出場する選手はいなかった」ことから五種競技は棄権している。水泳の競技結果は100m 自由型が予選3着で敗退し、400m 予選では日本泳法の抜き手で完泳して2着 (出場2人) となって準決勝へ進んだが300m で体が浮き力尽きたという。また、この写真に写っている竹内広三郎氏は、1917年 (大正6年) 及び1918年の第5回及び第6回日本陸上競技選手権にて十種競技で2連覇し (451点及び533点)、1924年パリオリンピック日本選手団役員、1928年アムステルダムオリンピック陸上競技監督を務めた人物である。また佐々木等氏は、1917年第3回極

東選手権のマラソン（10 マイルマラソン 3 位）及びサッカーに出場、1921 年第 4 回極東選手権のサッカーでは日本代表監督兼選手として出場した人物である。



写真 5. 1917 年（大正 6 年）東京高等師範学校の対科レースに優勝したときの記念写真（縦 150mm × 横 103mm）。

前列の左より西村真一（5 番）、竹内広三郎（6 番）、中列左より斎藤兼吉（3 番）、坂本秀弘、後列左より佐々木等（1 番）、中島海、下間佐吉（2 番）の諸氏。



写真 6. 1920 年 6 月アントワープオリンピックへ出発の船上での日本選手団（選手 13 名と役員 2 名）の記念写真（縦 75mm × 横 128mm）。

前列左から益田 弘（慶應義塾大：五種競技）、蓮見三郎（日本歯科大：陸上 800m 及び 1500m）、八島健三（小樽中：マラソン）、加賀一郎（明治大：陸上 100m 及び 200m）、大浦留市（東京高等師範学校：陸上 5000m 及び 10000m）、茂木善作（東京高等師範学校：マラソン）、中列左から佐野幸之助（松江青年：陸上 5000m 及び 10000m）、野口源三郎（大日本体育協会幹事：日本選手団主将：十種競技）、辰野 保監督、船長、深井健夫役員、金栗四三（大日本体育協会委員：マラソン）、後列左から 5 人目斎藤兼吉（東京高等師範学校：水泳 100m 及び 400m 自由型）、三浦弥平（早稲田大：マラソン）、内田正練（北海道帝国大：水泳 100m 及び 400m 自由型、10m 高飛び込み）、2 人置いて山岡慎一（東京帝国大学：陸上 100m 及び 200m）の諸氏。

また写真6のキャプションは「大正9年6月アントワープのOlympic大会に出発」であった。アントワープ大会の日本選手団（選手13名と役員2名（辰野 保監督と深井健夫役員））は、1920年（大正9年）5月14日にコレア丸（Korea丸）に乗船して横浜港を出港した（庭球の熊谷一彌と柏尾誠一郎の両選手及び嘉納治五郎団長はアメリカで合流）。途中ハワイに寄港してロサンゼルスに到着したとのことである。「昭和スポーツ史 オリンピック 80年」にはハワイに立ち寄ったときの一行（陸上と水泳の選手団）の記念写真が5月24日付で掲載されているが、キャプションの「大正9年6月」が正しいとすれば、この写真の撮影はハワイからロサンゼルスに向かう途中で撮影されたものと思われる。このことは、例えばハワイでの大浦留吉選手の髪型はほぼ丸刈り頭であるが、写真6の彼の髪型はやや長髪となっていることから伺える。

一方、アントワープ大会等の写真（おそらくIOC関係や報道等による公式写真を含む）を収集した写真帳を入手したが、この中に日本選手団の開会式（8月15日）における入場行進時の写真（絵葉書）があった。この写真はスポーツ史関連の書籍によく掲載されている有名なものであるが、多くは個人が特定されていない。「近代オリンピック 100年の歩み」などによれば、写真には写っていない金栗選手がJAPANのプラカードをもって先頭に、主将の野口選手が日章旗をもって続き、その後に写真に写っている横一列の役員等5名が左から体育研究のためにヨーロッパ滞在中の永井道明氏、深井健夫役員、辰野 保監督、在ベルギー日本公使館の小川書記官、YMCAのブラウン氏であり、その後に選手が4列になって行進しており、選手は手前の1列が前から茂木選手^(注2)、柏尾選手、熊谷選手である。また茂木選手の左腕横に写っているのはおそらく蓮見選手、永井氏の左肩には三浦選手、辰野監督の右肩には益田選手であると思われる。



写真7. 第7回アントワープオリンピック開会式における日本選手団の入場行進
(縦 87mm × 横 137mm).

3) 日本人初のオリンピックメダリスト熊谷一彌選手を育んだ慶應義塾大学庭球部の関連品

前述したように、日本人最初のメダリストはアントワープ大会でのテニスのシングルスとダブルス（柏尾ペア）で銀メダルを獲得した熊谷一彌選手である。日本の伝統的なテニスといえば軟式テニスを指すが、現在でも学校体育や部活動などで行われている。1890年（明治23年）に三田土ゴムという会社が東京高師の依頼により比較的廉価なテニス用のゴム球を試作提供し、これが「赤M」という軟式庭球ボールの元祖であり、日本のテニスもこの年から軟式庭球として普

及していった。そして、1898年（明治31年）から東京高師と東京高等商業学校（現一橋大学）との軟式庭球の対校試合が始まり、慶應義塾大学（以下慶應大と略す）庭球部は1902年（明治35年）に初めて公式試合（対東京高師戦）に出場している。

こういう状況の中で、慶應大は1913年（大正2年）にいち早く硬式庭球の採用を宣言して軟式庭球界から引退した。つまり、世界的に実施されていた「庭球」はローンテニスで硬球を使用していたので、横浜や神戸などの外国人倶楽部や東京ローンテニスクラブを除けば、一般には慶應大が日本国内で最初に国際標準の硬式テニスを実施したことになる。写真8に示した1931年（昭和6年）に出版された「慶應庭球三十年」は東京の古書店で入手したものであるが、当時選手であった野村祐一氏がこの本の80から95ページに「軟球から硬球へ」を、三嘴進氏が96から99ページに「硬球採用直後の苦心と第一回麻尼羅遠征」を記述しており、また冒頭の写真ページの9ページ目には庭球部員の集合写真「硬球採用記念 大正二年四月（後列左から3人目が熊谷選手）」、14ページ目には「熊谷一彌歓迎試合」の写真が掲載されている。

熊谷選手は1910年（明治43年）4月に慶應大の予科に入学するとすぐに庭球部（当時は軟式）に入り、早くも9月18日に行われた三田稲門秋期二回戦（慶應大対早稲田大）のダブルスに出場して勝利している。そして、慶應大がテニスを軟式から硬式に変更した1913年（大正2年）の12月に初の海外遠征となる第一回比律賓遠征（東洋選手権大会）の代表4人（野村祐一、市川重二、三嘴進、熊谷一彌：いずれも慶應大庭球部）にも選ばれた。翌1914年1月に行われた大会では、熊谷はシングルス準決勝で全米2位のフォットレル選手に敗退し（セットカウント2-3）、ダブルス（野村ペア）では決勝で全米3位のジョンストンとフォットレル組に敗れている（0-3）。熊谷選手は硬式転向後わずか8ヶ月で世界の一流選手とわたり合えたことで自信が付いたという。慶應大本科3年のときに1915年第2回極東選手権大会（上海）に出場してシングルスとダブルス（柏尾ペア）で優勝している。

1916年（大正5年）に熊谷選手は慶應大を卒業し、短期間のアメリカへのテニス旅行（この間大会に出場してジョンストン選手に勝ったりして全米5位にランクされる）を経た後、1917年に就職活動で紆余曲折があって苦労したものの三菱合資会社銀行部（現三菱銀行）に入社し、ニューヨーク支店勤務となった。1916年から1919年にかけて様々な国際大会に出場して好成績を上げ、1919年には全米ランキング3位にまで上がった（1位はジョンストン選手^(注3)、2位はチルデン選手^(注4)）。この実績から、アントワープ大会の庭球の日本代表選手に選ばれているが、少なくとも日本では最も早くから国際標準の硬式テニスに触れて、その後テニスの盛んなアメリカで競技力を磨いたことがオリンピックでの銀メダル獲得につながったものと思われる。

写真9には、1920年に慶應大庭球部が作成したと思われる記念メダルを示した。このメダルには小穴が空いているので、おそらくペンダント用のメダルであると思われる。このメダルは慶應大庭球部の創部20周年記念か、あるいはOBの熊谷選手が1920年のオリンピックで銀メダルを獲得したことによる記念に作成されたものと推測されたので、メダル表に描かれているサーブを打つテニス選手のモデルが熊谷選手だと思って入手したが、彼は左利きであったので別の選手であることがのちに判明した。

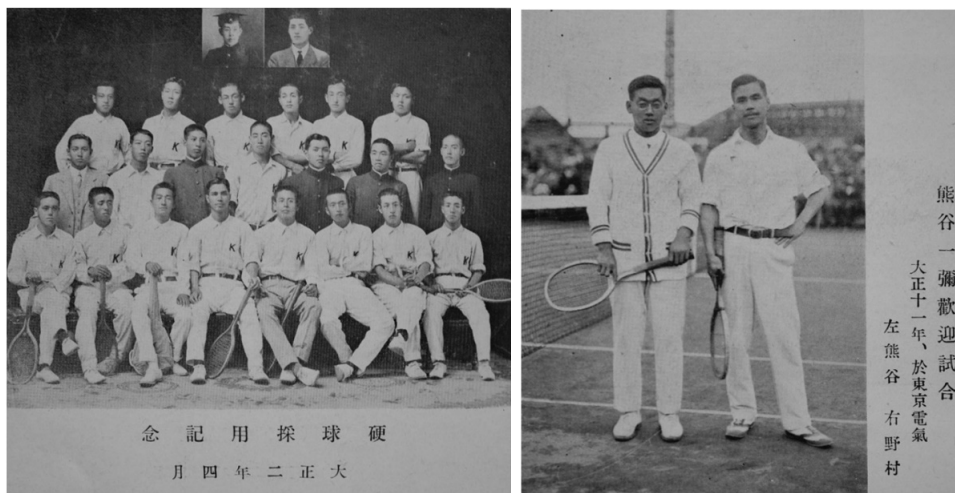
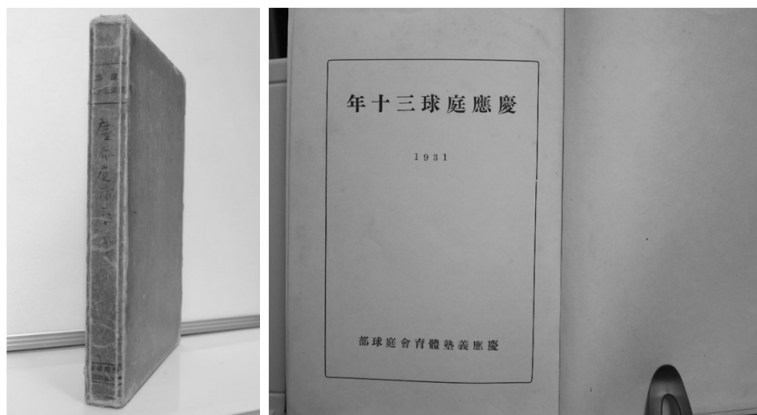


写真 8. 「慶應庭球三十年」(1931 年発行) の外観と掲載写真左 (「硬球採用記念 大正二年四月」
: 後列左から 3 人目が熊谷選手) と右 (「熊谷一彌 歡迎試合」).



写真 9. 慶應義塾大学庭球部の創部 20 周年 (?) の記念メダルの表と裏 (直径 26mm).

4) アントワープ大会陸上男子 1500 m銀メダリストのフィリップ・ノエル-ベーカー氏の直筆サイン

写真 10 と 11 に示した直筆サインは、1920 年アントワープ大会でイギリス陸上競技選手として銀メダルを獲得し、また 1959 年（昭和 34 年）にノーベル平和賞を受賞したイギリスのフィリップ・ノエル-ベーカー氏（Philip Noel-Baker: 1889 年 11 月 1 日 -1982 年 10 月 8 日）のものであり、サインの上の横顔写真は元の持ち主が貼り付けたものと思われる。今日までにオリンピックのメダリストでかつノーベル賞を受賞したのはノエル-ベーカー氏だけである。サイン下の日付は「January 20, 1972」（1972 年 1 月 20 日）であり、ノエル-ベーカー氏は 1970 年にイギリス下院議員を引退したが、その後も軍縮や核廃絶などの平和運動やオリンピック大会にも積極的に参加しているころのサインである。このころに開催された札幌冬季オリンピック（1972 年 2 月 3 日から 13 日まで）に彼が参加したという記録は見当たらない。

ノエル-ベーカー氏とオリンピックとの関わりは深く長い。1908 年の地元開催であるロンドン大会では見学者であったが、1912 年ストックホルム大会（ケンブリッジ大学学生）では陸上男子 1500 m で 6 位入賞し、1916 年ベルリン大会は第一次世界大戦のため中止されて出場できず、1920 年アントワープ大会（イギリスチーム主将）では同種目で見事に銀メダルを獲得し、1924 年パリ大会でも主将として選手登録されていたが突然の怪我で競技出場を断念したという。また 1936 年ベルリン大会（役員としての参加登録だと思われる）にはナチス政権の反ユダヤ主義に抗議して大会参加を拒否している（イギリスチームは大会に参加しており、後にボイコットしたことを自己批判している）。1948 年の 2 回目のロンドン大会では当時コモンウェルス大臣であったがオリンピック担当として大会組織委員会と協力して大会を成功に導き、1952 年ヘルシンキ大会ではイギリス選手団団長として参加している。その後の 1964 年第 18 回東京大会や 1980 年第 22 回モスクワ大会などにも視察等でオリンピックに参加している。つまり、1908 年から 1980 年までに開催された全ての夏季オリンピックを 1 度も欠かさずに現場で見てきた人物である。

一方、ノエル-ベーカー氏の他の経歴としては、大学卒業後にイギリス労働党員となり、第一次世界大戦では前線で戦闘に参加することを拒否し、その代わり傷病者輸送隊として負傷兵士の救済に従事した。大戦後に軍縮研究に没頭し、1919 年にはパリ平和会議に出席し、国際連盟規約の草案作成に参加した。国際連盟の創立準備作業の激務の中で彼はオリンピック代表権を勝ち取り、本番でも銀メダルを獲得している（当時 30 歳）。国際連盟の創設に尽力し、世界各国に軍縮を訴え、その後は反核・平和運動を推進した功績が認められ、1959 年にノーベル平和賞を受賞した（その賞金の大半を国連協会に寄付している）。ちなみにノエル-ベーカー氏は核兵器廃絶運動の一環として広島（平和祈念式典などに出席）に 1962 年から 1980 年までの期間に 5 回（他は 1970 年、1975 年、1977 年）も訪問している（1979 年には長崎の核兵器廃絶集会にも参加した）。そして、広島では「オリンピックは 20 世紀最大の平和運動。国際政治もオリンピックから学ぶべきである」という言葉を訴え続けてきたノエル-ベーカー氏の功績を讃えた記念碑を広島平和記念公園の中の広島国際会議場 1 階ロビーに展示していたが、現在は広島経済大学（広島市安佐南区）の石田記念体育館に設置されている。この記念碑では彼を次のように紹介している。

「He left the famous saying, “A great hope for human beings is that the Olympic games exist in this atomic age.”（「この核の時代に、人間にとって大きな希望はオリンピックがあることだ」という名言を残しました。）。

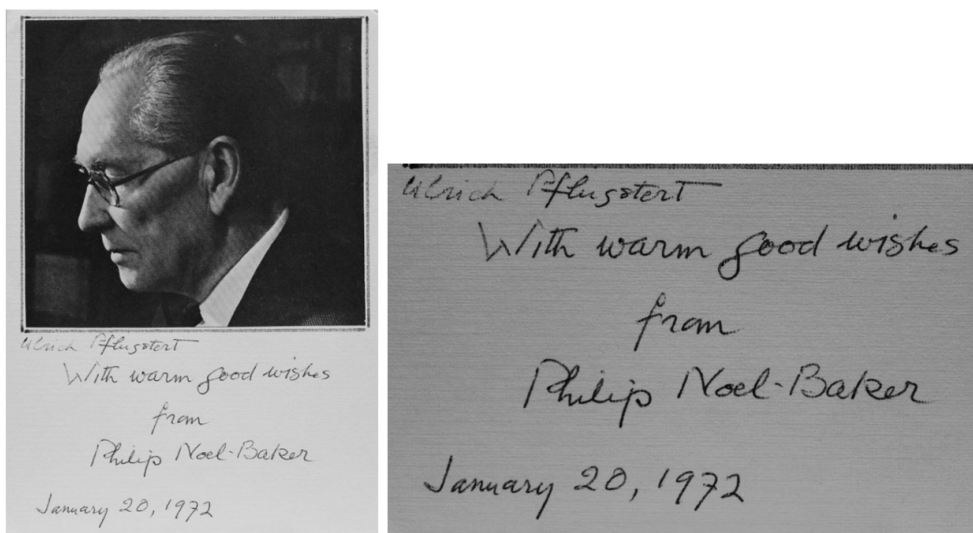


写真10 (左). フィリップ・ノエル・ベーカー氏の直筆サイン. 写真11 (右). サインの拡大写真.

3. おわりに

オリンピック関連資料の収集において、特に戦前のオリンピック選手や役員などが写っている写真や絵葉書を手したときに困ることは、それが誰か分からないことや顔と名前が一致しないことである。有名なメダリストや選手引退後に競技連盟（役員や指導者として）などに関わって関連雑誌や書籍（近年ではインターネット上で掲載されることがある）に人物写真が掲載されることがあるが、そうでなければ名前を確認することが困難なことが多い。今回報告した写真5（「東京高師対科レースに優勝」）にはアルバムに全員の記名があったために名前を特定できた。しかし、写真6（「アントワープのOlympic大会に出発」）には東京高師関係者5名（金栗四三、野口源三郎、茂木善作、大浦留市、斎藤兼吉）しか記名が無かったので、他の選手は様々なスポーツ史関連資料をいくつも調べることによって顔と名前を一致させることができたが、後に野口源三郎氏の著書「第7回オリンピック陸上競技の印象」（1921年発行）の中に記名付きの同じ写真を発見した。

一方、著者は今日までにオリンピック選手や役員など千名近く（各競技のチームサインを含めた延べ人数）の直筆サインを収集してきたが、問題点としては本人から直接貰っていない場合はサインが直筆であるとの判断ができるか否かということであり、その真贋の鑑定作業が必要不可欠である。例えば、特に戦前は写っている選手が写真に万年筆で直筆サインをしたものが多かったのでおそらく直筆であることがほとんどである（写真を新しく複製したものは除外）。また第一報（2019年）で報告した1964年東京オリンピックの日本男子陸上競技チームのサイン寄書（19名の中に唯一女子の依田郁子選手のサインが含まれている）は、著者が直筆サインを貰った選手が複数含まれており、織田幹雄監督や円谷幸吉選手などのサインも複数所有していることから詳細に筆跡や書かれた紙質等の比較ができること、さらにはこの色紙の裏にも外国選手のサインが複数書かれていることから直筆であることに疑う余地が見当たらない。今回報告したノエル・ベーカー氏単独のサインについても偽物作成に利用される可能性があるので具体的に明言することは避けるが、いくつかの理由から直筆であるとの確信がもてるものであった。

このような地道な作業を行った上で収集品を公開することによって、人々に忘れ去られスポー

ツの歴史に埋もれてしまっている過去の偉大な選手たちを再び顕彰することができるとするならば、そのことが人物はもちろんのこと、オリンピックやスポーツの評価をさらに高められるようになることを期待している。

注釈

(注1) ルイス・レイモンド (Louis Raymond, 1895年6月28日-1962年1月30日) は、アントワープ大会のテニス男子シングルス決勝で熊谷を5-7、6-4、7-5、6-4で破って金メダルを獲得した。レイモンドはダブルスにもブライアン・ノートン (1921年ウインブルドン男子シングルス準優勝者) とペアを組んだが、準々決勝で熊谷と柏尾ペアに3-6、2-6、6-4、3-6で敗れているので、熊谷にとってはシングルス決勝での敗戦は不本意な結果であったという。決勝当時 (8月21日) は降雨のためにメガネをかけていた熊谷が不利になったとの説がある。

(注2) 茂木善作 (もぎ ぜんさく:1893年12月10日-1974年12月24日) は、山形県飽海郡 (現酒田市豊原) 出身の陸上競技選手であり、東京高等師範学校在学中に1920年2月14日から15日に開催された第1回東京箱根間往復大学駅伝競走 (出場校は東京高等師範学校、明治大学、早稲田大学、慶應義塾大学の4校) の10区アンカーを走り、復路独走の明治大学の11分52秒差を逆転して25秒差をつけて優勝に導いた。1920年8月22日に行われたアントワープオリンピックのマラソンでは2時間51分9秒4の記録で20位になっている (金栗四三16位、八島健三21位、三浦彌平24位)。

(注3) ビル・ジョンストン (Bill Johnstone, 1894年11月2日-1946年5月1日) は、1915年の全米テニス選手権で初優勝を飾り、この年から1919年まで5年連続で全米ランキング1位を維持した。1919年に4年ぶり2度目の全米選手権優勝を果たしたときに、この年のランキングは1位がジョンストン、2位がビル・チルデン、そして3位に熊谷が入っている。1919年から1925年までの全米選手権の男子シングルス決勝でチルデンと決勝対決を行い、1920年から1925年まではチルデンが6連覇を達成した。

(注4) ビル・チルデン (Bill Tilden, 1893年2月10日-1953年6月5日) は、1918年の全米テニス選手権準決勝で日本人テニス選手として史上初めて4大大会 (全米、全仏、全豪、ウインブルドン大会) 準決勝に進出した熊谷と対戦して破っている。また1920年のウインブルドン大会で優勝したときも清水善造の挑戦を退けている。全米選手権では1918年から1925年まで8年間連続で決勝に進出している (6回優勝)。

参考文献

- ・藤瀬武彦. スポーツ文化財としてのオリンピック関連資料の収集について 第一報 - 1912年、1940年、及び1964年夏季オリンピックに関する収集体-. 新潟国際情報大学国際学部紀要, 4, 145 - 157, 2019年.
- ・福田雅之助. 改定新版 庭球百年. 時事通信社, 東京: 1976年.
- ・小泉信三. 慶應庭球三十年. 慶應義塾體育會庭球部, 東京: 1931年.
- ・熊谷一彌. テニスを生涯の友として 熊谷一彌遺稿. 講談社, 東京: 1976年.
- ・毎日新聞社編集部. 別冊1億人の昭和史 昭和スポーツ史 オリンピック80年. 毎日新聞社, 東京: 1976年.
- ・日本オリンピック委員会. オリンピック事典. 日本オリンピック委員会監修, 日本オリンピッ

- ク・アカデミー編, プレス ギムナスチカ, 東京:1981年.
- ・日本オリンピック委員会. 近代オリンピック 100年の歩み, ベースボール・マガジン社, 東京:1994年.
 - ・日本体育学会体育史専門分科会 (代表 伊藤 明). 日本スポーツ百年の歩み, ベースボール・マガジン社, 東京:1967年.
 - ・日本体育協会編. 日本スポーツ百年, 財団法人日本体育協会, 東京:1970年.
 - ・新潟日報編集部. パイオニア列伝 斎藤兼吉 五輪へ本県第1号水陸2競技の代表 水泳ニッポン 礎築く. 新潟日報朝刊, 2006年3月25日.
 - ・野口源三郎. 第7回オリンピック陸上競技の印象. 就文社, 東京:1921年.
 - ・織田幹雄. 改定増補 陸上競技百年. 時事通信社, 東京:1970年.
 - ・佐野雅之. オリンピックエピソード. 窓社, 東京:1988年.
 - ・滝沢次朗. 知れば100倍楽しめる! オリンピックの秘密. 彩図社, 東京:2008年.
 - ・内海和夫. 「オリンピックと平和」・ノエル・バーカー卿・広島経済大学. 広島経済大学研究論集, 第34巻第2号, 1-21, 2011年.
 - ・内海和夫. オリンピックと平和 - 課題と方法 -. 不昧堂出版, 東京:2012年.
 - ・ウィキペディア (Wikipedia). ビル・ジョンストン (Bill Johnstone: 2019年12月24日確認).
 - ・ウィキペディア (Wikipedia). 茂木善作 (2019年12月24日確認).
 - ・ウィキペディア (Wikipedia). ルイス・レイモンド (Louis Raymond: 2019年12月24日確認).
 - ・ウィキペディア (Wikipedia). ビル・チルデン (Bill Tilden: 2019年12月24日確認).

